

同潤会江戸川アパートメント建替計画

～回顧録 1 【設計主旨】～

- アトラス江戸川アパートメントは、(同潤会)江戸川アパートメント(昭和9年竣工、以下江戸川APと言う。)の建替計画として計画された。江戸川APは、同潤会の集大成として都市居住の理想型を追求した東洋一のアパートメントとして建築史的にも都市計画的にも大きな意義を持つ集合住宅であった。この集合住宅の建替計画の歴史は、東京オリンピック(昭和39年)から始まっていたと言われているが、種々の挫折を繰り返し、旭化成ホームズ(株)がパートナーとして選定されたのは、平成13年であり、既に江戸川APは築70年を経過していた。当初の半年間は、敷地の範囲・保存問題・総合設計等の課題の整理であったが、これが整理されてからの設計は大きくは2つの観点からの格闘であった。



中庭を囲む建物(解体前 平成15年撮影)



コミュニティの場でもあった旧アパートメントの中庭の風景



多目的に使われた旧社交室の風景

- 1つは基準法と容積消化である。建替えの合意形成上還元床UPのために容積率を最大限消化する必要があるが日影・高度規制を持ったこの敷地に、基準法「刈」で容積率を最大限確保するとすれば、凹型を北側に向けて階段状にした形態になってしまうが、それは単なる箱型マンションである。今回の配棟や形態で意図したのは、都市居住という多様な個の集積を持ちながら、集合体としての景観である。建物は6棟によって構成されているが、全体を雁行と言う形式で表現したのもこの意図に基づく。また、これにより平面的では高密でも住戸のズレによる「抜け」の空間を確保することができ、更に各住棟間の「離隔空間」も「シーケンス」としての空間に転換させた。



敷地配置図

東西南北に風・視線が通り抜ける快適で放的な空間を創出する。



センターコート



北側にあるコートハウス棟